

より良い企画展を作るには？ ～展示を評価しながら考える

世界中の博物館等施設で数多の企画展示が日々新たに生み出されていますが、その展示制作までのプロセスは、内容や目的、予算規模等によって実に様々です。当館は特別展や企画展にかけられる予算が限られていることもあり、学芸員自身が学術的な内容に関するのみならず、企画立案、展示物のデザイン、印刷物の編集、展示台の工作からラベル製作まで、ボランティアさんたちの助けも借りながら、ほぼ手作りで展示を作り上げています。

ここでは次回の企画展を例に、当館では展示をどのように企画し、どのように練り上げているのか、その裏側を少しご紹介したいと思います。

展示室入場者の傾向を読み解く

博物館には、どのような人が訪れているのでしょうか。展示を企画するにあたり、その展示を見に来てほしい人、すなわちターゲット層を設定しますが、その第一歩として、普段の来館者層を知っておくことは欠かせません。

当館の2022年度の常設展示室への入場者の内訳は図1の通りです。小学生以下(園児+小学生)の入場者が約35%を占めます。ここ20年ほど、小学生以下の入場者は成人の入場者(全体の25~35%程度)を上回る傾向にありました。そのため我々学芸員は子ども向け展示の重要性を認識し、特別展での子ども向け体験コーナーの設置など様々な

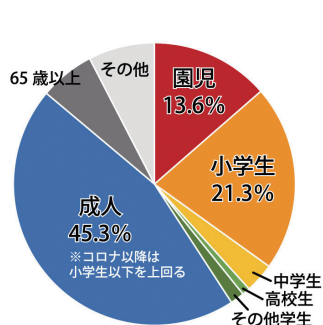


図1. 当館の常設展示室の入場者(2022年度, 計224,862人)の属性の内訳。発券を元とした統計のため、0~2歳の入場者や無料エリアの利用者は含まない。

試行をしてきました。

ところが2014年度あたりから小学生の入場者数は減り、むしろ「園児(3~6歳の未就学児)」の存在感が増してきていることが分かりました(図2)。開館当時は入場者の6~7%程度しかいなかった園児がじわじわと増加し、割合のみならず実際の人数としても増えています。

さらに当館の場合、3歳未満の来館者には観覧券を発券しないため、0~2歳は統計の対象外となります。2022年度の場合、「園児」は3~6歳の3.5学年(年少の1つ下の学年で3歳になった児+年少+年中+年長)分で入場者の13.6%、「小学生」は6学年分で入場者の21.3%です。つまり1学年あたりで見た園児の利用は、小学生と同等か、それ以上に多くなっているのです。

小学生の場合、その半数程度が学校等による団体利用ですが、園児の場合は多くが家族など個人単位での利用です。つまり近年利用が増えているのは「幼児を含む家族連れ(以下、「親子連れ」)」だと推定することができます。週末に展示室を巡回していると、2歳以下と思われる乳幼児を連れた親子連れも多く、統計が示す数字以上に展示室を利用する未就学児の数が増えていることを感じます。

“親子連れ”の来館が増えているのは当館だけではなく、近年、多くの自然史系博物館や科学館で同様の傾向があるようです。子どもが小さな頃から博物館

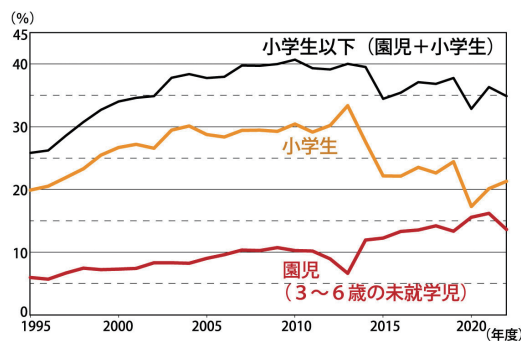


図2. 「園児」と「小学生」、それらを合わせた「小学生以下」の入場者の割合の年度変化(1995~2022年度, 当館年報データに基づく)。新型コロナウイルス感染症が流行した2020~2022年度は、成人の割合が増えて子どもの割合が減り、小学生以下の入場者割合を成人が上回った。

等に連れてくる教育熱心な保護者の方が増えているのか、幼児連れで出かけられる場所が減っているのか、小学生も高学年になると家族で博物館には来なくなってしまうのか…理由は気になるところですが、ともあれ近年の当館の展示室は、この少子化の世の中にもかかわらず、“親子連れ”を抜きには語れなくなっているのが現状です。

幼児も保護者も楽しめる展示の企画を

このような現状を受け、幼児にも保護者にも楽しんでもらえるような展示のあり方について、2020年度から加藤学芸員・大坪学芸員・広谷名誉館員らとともに研究助成を受けて検討を重ねてきました(JSPS 科研費20K01132)。クイズやポップ解説など、展示に「ちょい足し」する親子向け企画はこれまででも実施してきたのですが、一度それなりの広いスペースを使って親子連れをターゲットとした展示を作れないかなあと考えていたところ、2023年度の企画展の一部として実践してみても?という声があり、早速、昨年の秋頃から具体的な展示内容の検討を始めました。

企画展「動物たちの暮らし~^{やぶうちまさゆき}藪内正幸が描いた生態画の世界~(仮)」は、動物生態画家として著名な藪内正幸氏のイラストを当館収蔵の^{ほくせい}剥製や写真等とともに展示し、動物たちのくらしぶりを伝えるとともに、動物生態画の重要性や魅力などを紹介する展示です(2024/2/23~5/12開催予定)。図鑑などに掲載された生態画の原画をじっくり見せようとすると、主なターゲットは大人ということになりそうですが、藪内氏は絵本や児童書の挿絵の仕事も多く手がけています。そこで本企画展では、大人向けコーナーと親子連れ向けコーナーを設け、展示室を二分した展示構成にチャレンジしてみることにしました。もちろん、全体の構成として誰にでも楽しめる工夫を凝らすことは大前提です。

親子連れ向けコーナーでは「絵本に出てくる生態画と剥製を通して、動物たちの生態をやさしく伝え、親子で対話

をしながら動物に親しみをもってもらう」ということを目標に掲げました。せっかく博物館で展示をするのだから、生態画と剥製を並べて展示したい！というのが我々学芸員が考えた基本コンセプト。その方向性で展示内容を議論していたのですが…その中で出てきたのが「幼児は剥製を『死』に近いものとして怖がるのでは？」という意見でした。

確かにそうかもしれません。もしかしたら幼児には、実物の剥製よりも、伝えたい情報を詰め込んで作った「ぬいぐるみ」を展示した方が良いのだろうか？ちょっと考え込んでしまった私は、来館者の生の声を聞いてみよう！と思い立ちました。

展示を形成しながら「評価」する

来館者の理解度や満足度の高い展示を作るためには、展示の「評価（エバリュエーション）」を行い、その結果をふまえて企画を再検討したり、修正や改善を行ったりすることが有効です。「評価」といっても、入場者の人数とか、入館料収入の金額とか、出口調査で〇〇%の人が「満足」と答えたから展示は成功…とかいうことではありません。学芸員の意図が無理なく伝わり、来館者も満足できる、そんな展示を作るために来館者の声を聞き取り改善に生かすのが、展示の「評価」です。

展示の評価には、企画段階に行う「事前評価」、展示を形成する途中で行う「形成的評価」、展示完成後に行う「総括的評価」があります。今回実施したのは試作展示を作り、それを見た人の反応を探る「形成的評価」です。「剥製の展示は親子連れに受け入れられるのか？」という問いを立て、「①剥製＋生態画」と「②ぬいぐるみ＋生態画」という2つの試作展示を作り、それらに対する印象や好みを回答してもらって展示の方向性を確認することにしました。当館で実施する企画展だから、実際に当館に足を運んでくれた人に意見を聞くのが妥当だろうということで、開館記念イベント「ミュージ・フェスタ2023」（2023/3/11-12）にて試作展示を前にアンケート調査を実施したところ（図3）、2日間で202枚の回答を得ることができました。



図3. 試作展示(上)と形成的評価の実施の様子(下) (ミュージ・フェスタ2023).

回答を分析した結果、約2/3の人が「①剥製＋生態画」、約1/3の人が「②ぬいぐるみ＋生態画」の展示を好むことが分かりました。この割合は、親子連れでも成人でもそれ以外でも、回答者の属性に関わらず、ほぼ一定であることも分かりました（図4）。つまり、親子連れが成人よりもぬいぐるみ展示を好むわけではない。これは意外な結果でした。確かに何件か、乳幼児を連れられた方から「幼い子どもに剥製は怖い」という意見も寄せられたのですが、それ以上に「博物館では子どもに本物を見せたい」とする保護者が多数派だったのです。

ということで、我々が確かめたかった「剥製の展示は親子連れにも受け入れられるのか？」という問いに対する答えは「Yes」。実物の標本を見たいという声、博物館らしい展示を求める声を受け、今回は剥製と生態画を並べるという当初のコンセプトのまま準備を進めることに決めました。しかし一方で、実際に来館した人の1/3は「②ぬいぐるみ＋生態画の展示」を嗜好したことも事実です。これらの来館者を排除しないような展示を検討する必要もありそうです。

なおアンケートでは「企画展ではどんな展示が見たいですか？」についても、複数選択可で聞いてみました。最も多かったのは『生き物の勉強になる展示』という回答で54%。この設問の回答分析で興味深かったのは、属性（親子

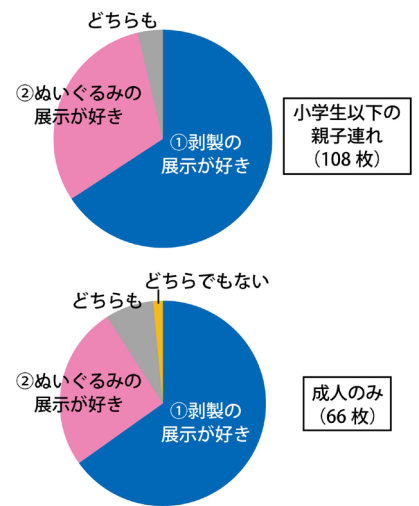


図4. 「①剥製＋生態画の展示」と「②ぬいぐるみ＋生態画の展示」どちらが好きですか？という問いに対する回答(全202枚に対する割合)。小学生以下の親子連れでも、成人のみでも、どちらも回答の割合はあまり変わらなかった。

連れか成人か)以上に、「①剥製派」か「②ぬいぐるみ派」かによって回答の傾向が分かれたことです。「①剥製＋生態画の展示」を好んだ人は、親子連れであれ成人であれ『生き物の勉強になる展示』を嗜好。一方「②ぬいぐるみ＋生態画の展示」を好んだ人は、『低い位置にある展示』『親子で楽しめる展示』に重きを置く傾向があることが分かりました。そして『一緒に記念撮影できる展示』を最も嗜好したのは、親子連れではなく「②ぬいぐるみ派」の成人でした。どんな展示を見たいかは、その人が博物館に何を求めているかによって回答が異なるのだなあと考えさせられる結果でした。

評価の先の、より良い展示へ

ミュージ・フェスタ2023における多くの皆様のご協力のおかげで、展示の形成的評価を行い、企画展の方向性を確認することができました。その後も試作展示を作っては関係者に見てもらって感想を聞くなど、展示内容を最終決定するための準備作業を続けています。

やるべきことはまだ盛り沢山ですが、学芸員の展示意図を上手に伝え、かつ皆さんに楽しんでいただける展示になるよう、企画展チーム一同頑張っていきたいと思います。まだ少し先ですが、来春の企画展、ぜひ見に来てください！